

シンポジウム趣旨説明

「歴史地理学における絵図・地図」によせて

長谷川孝治・小野田一幸

本特集号の刊行にあたり、平成21年9月20日に神戸大学・瀧川記念学術交流会館で開催されたシンポジウム「歴史地理学における絵図・地図」の経緯と趣旨を説明することにした。

すでに『歴史地理学』第49巻第4号誌上(2007年9月刊)に、平成20・21年の共同課題として「歴史地理学における絵図・地図」の趣旨が掲げられているが、本シンポジウムの具体的な企画は、平成19年秋より当時の歴史地理学会常任委員会を中心に推進された。その際の計画では、歴史地理学会は長らく共同課題として絵図や地図をテーマとして扱うことがなかったため、平成20年度(第51回)大会を共同課題「歴史地理学における絵図・地図」として宮城大学で開催し、翌平成21年度(第52回)大会は、シンポジウムを開催するというものであった。

さて、歴史地理学会大会の共同課題で、絵図・地図がテーマとして扱われるのは、昭和53年4月に國學院大学で開催された第21回大会の「地図と歴史地理」が初めてであった。この大会後に編集された『地図と歴史地理(歴史地理学紀要21)』(昭和54年3月刊)で序を執筆した織田武雄は、「歴史地理学の研究の基本的資料としては、云うまでもなく、古文書や古記録などの史料や地名の採録、さらに先史地理学では遺物や遺跡も重要な研究資料である。しかしこれらとならんで、いま一

つ重要なのは古地図類である。それは、たとえ稚拙、素朴な絵図のようなものであっても、地図が地表の一部を縮小して平面に描き表したものである以上、それがつくられた当時の、ある一定の地域における事物の分布や配列の状態を、これを通してうかがうことができるからである」と歴史地理学の研究における絵図・地図資料の意義を強調している。もっとも、地図に関する発表は6件のみであり、歴史地理学の本質について「歴史地理学を歴史学や考古学の下僕にしないためにもともに考えて行かねばならぬ問題である」との所見が大会報告に掲載されている。この意味で絵図・地図が新しい視点から解読が試みられたのは、むしろその6年後の昭和59年4月に砺波市文化会館で開催された第27回大会であり、その成果である『空間認識の歴史地理(歴史地理学紀要27)』(昭和60年3月刊)には現在でも色褪せない、絵図・地図に関する優れた諸論攷が収録されている。

絵図・地図資料のもつ重要性は現在も変わらないが、上記2大会からすでに四半世紀ほどが経過した。この間、歴史地理学はもちろん、歴史学、考古学、文化人類学、美術史学、建築史学など、他領域でも絵図・地図の資料的価値が認識され、とりわけ1980年代以降は、絵図・地図の史料批判、図像分析、コスモロジー解読など、それら資料の意味そのものを追究する研究が展開された。従って、

キーワード：絵図，地図，歴史地理学

絵図の系譜的研究や、単なる歴史地理学の一資料として絵図・地図を利用する実証的研究から、それらの意味論的研究へと大きくパラダイム転換を遂げた。しかし、世紀の転換期ころからの研究は、情報化社会を反映して絵図・地図のデジタルベース化やGIS利用など、パラダイムを逆戻りさせるベクトルが強く働いている。この潮流はグローバルなものであり、絵図・地図を議論する国際地図史学会や国際地図学会・地図史委員会でも、政治・軍事・社会・文化などに主要テーマが移行しつつあるものの、地図資料から大量の情報を抽出する報告が主流になっている。しかし今後は、こうした情報過多の前に佇むだけでなく、個々の絵図・地図の意味を解明し、深い思索を巡らすような研究動向が世界的にも必然であろうと考えられる。

本シンポジウムの開催が、歴史地理学における絵図・地図の意味を再発見すると同時に、それらを活用した新しい方法論、思想論の地平を切り開く契機となることが期待された。

シンポジウムは、つぎの2つの視点から構成された。第一は、絵図・地図の空間分析や地理思想などの研究は、かつて歴史地理学を中心とする地理学からアプローチされ発信されてきた。しかし、近年は隣接領域の歴史学などからのアプローチ、そしてこれら諸領域の研究者を交えた学際的研究が主流となっている。これらの研究成果を歴史地理学がどのように受信し、批判的に継承、再発信していくかという研究領域間での模索である。第二は、近年、歴史地理学を中心とする研究者が集って各地で絵図・地図の研究会が発足し、その成果が公刊されている。それらの情報が交換されることで、新しい視点を生み出す可能性を探る学内での試みである。

具体的には、《古代・中世》《近世Ⅰ》《近世Ⅱ》《東アジア世界》と4セッションを設定した。一つのセッションには報告者2名と

コメンテーター1名、最後に総合コメントと討論という形式を採用した。いずれの研究者も、現在第一線で活躍している若手・中堅であり、今後の歴史地理学を担うことが期待されている。

午前中の《古代・中世》は、三河雅弘「古代日本における田図および荘園図の機能と表現内容」と福島克彦「中世都市丹後府中と『天橋立図』」の2報告からはじめた。三河氏が扱う田図や荘園絵図は、歴史学を中心に膨大な先行研究がある。ただ、多くの研究成果があるからこそ、歴史地理学からの新しい視点を提示することが必要不可欠と考えられる。また福島氏がテーマとする『天橋立図』は、周知のように雪舟によって15世紀末に描かれたものであるが、その情報量の多さから、当時の景観を復原する史料としても注目される。“風景画”が景観復原の素材としていかに活用できるのか、という報告に期待した。

続く《近世Ⅰ》では、江戸幕府撰国絵図を議論の対象に据えた。国絵図研究は、川村博忠氏の『江戸幕府撰国絵図の研究』公刊以来、多くの研究が蓄積されてきたが、国絵図自体の政治的な意味や、国内外に現存する国絵図の個別的な分析など、未だ議論の余地が多い。磯永和貴「国絵図研究の課題」と尾崎久美子「北方社会の政治的コンテクストからみた天保国絵図改訂事業」では、これらの視点を踏まえた議論が予想された。

午後からは《近世Ⅱ》として、上杉和央「地図史における森幸安の再布置」と渡辺理絵「城下町絵図をめぐる近年の研究動向と諸課題」の2報告が続いた。上杉氏は、地図を媒介とする智のネットワーク形成を精力的に解明してきているが、本報告の森幸安の再位置づけもこれにも関連した内容となる。渡辺氏が扱う城下町絵図研究も研究蓄積が多く、これまでの研究成果を踏まえながら、独自の絵図論の展開を意図するものである。

最後に《東アジア世界》として、渋谷鎮明「朝鮮半島における近代都市図作成の展開」と小島泰雄「中国都市図の近代的展開」の2報告を設定した。前者では韓国併合前後までに作成されたソウル都市図の系譜を、後者では清朝末期から民国初期の中国内陸部都市、成都の都市図がテーマである。対象地域は異なるが、いずれも東アジアの近代化過程を都市図から論じる内容であり、伝統的都市図から近代的都市図への変容を辿ることになる。

総合コメントは出田和久氏にお願いするとともに、引き続いて質疑時間を30分間設けた。これは、報告者と会員諸氏が相互に活発な議論を交わすことを意図したものである。地図・絵図への歴史地理学的アプローチがど

のような意義および可能性を有しているか、さらには、学際的研究をどう主導していくか、などという点にまで議論が高まることが期待された。

もとより、絵図・地図をテーマとする歴史地理学的研究を、本シンポジウムの報告で全てカバーできるとは考えてはいない。ただ、全国学会のシンポジウムの中で活発な議論が交わされることで、絵図・地図に関する歴史地理学の新しい方向性を探求する端緒として、本シンポジウムが位置づけられれば幸いである。

(長谷川孝治：神戸大学人文学研究科)

(小野田一幸：神戸市立博物館)

Introduction to the Special Issue: Pictorial and Modern Maps in Historical Geography

HASEGAWA Koji (Kobe University) and ONODA Kazuyuki (Kobe City Museum)

This Special Issue is edited on the base of the Symposium “Pictorial and modern maps in hisotrical geography” which held in the Annual Meeting of the Association of the Historical Geographers in Japan at Takikawa Memorial Hall, Kobe University on September 20, 2009. In this symposium eight papers and five comments, including the general one were read. Main themes dealt in the papers are ancient manorial maps, county and castle town maps in early modern Japan, and modern urban mapping in East Asia. The editors expect this symposium pomote the further progress on the research of early and modern maps in historical geography, and construct the new paradigm on it.

Key words: Pictorial maps, Modern maps, Historical geography